

+ 25 【がば】

大川にはいくつかの橋がかかっている、そのひとつは〈猿橋〉といいます。

大昔に猿がかけた橋を、命綱を頼りに命がけで修復したものだそうですが、細くて古い、いわゆる木と綱の吊橋ですから、猿橋を渡る者はありません。

挑戦した者は三人いたそうですが、百米下の急流に落下しそうになって、命からがら戻ってきたそうです。

いままで渡り切った者は、たった一人しかいないとのこと。

村の老人たちは、

「あれは【さるはし】というおぼけじゃから、人が渡ると揺らして落とそうとするんじゃよ。渡る者は自殺行為じゃから、長生きしたい者は渡らんことじゃよ」

とっていました。

たしかに風の強い日などは、猿橋は大きく揺れます。

どこを修復したというのか、木だって綱だってぼろぼろです。

ぼくはいつか、この猿橋を渡ってやろうとかがえていたものですから、村の老人の一人に、

「わたりきったという、ゆうかなやつはだれじゃ」

ときいてみました。

すると、

「いまは祠に住んでいる乞食じじいじゃよ。あいつが十年前に渡り切ったのが、最初で最後じゃよ」

と答えたのです。

懐爺だったのです。

「やっぱし、かいじいはすごいのう」

ぼくは自分が渡り切ったつもりになって、威張りました。

「くそつたれ。あいつはただ、自殺したかっただけじゃよ」

老人はそう吐きだしました。

それで懐爺にきいてみました。

「かいじいは、じさつしたかったんかのう」

「とんでもない。わたしは自殺は自分を殺すことですから、人殺しだとかんがえています」

「そんなら、どうしてさるはしをわたったんじゃ」

懐爺は喋りたくないという顔でした。

それでも、ぼくがあまりしつこくきくものですから、渋々語りはじめます。

「【さるはし】は昔から、おぼけの橋といわれてきました。いまはだれも渡ろうとしませんし、渡ろうとした人も途中で引き返してきますが、昔はあの橋を渡り切ろうとして、落ちた人がいっぱいいたものです。そうして落ちた人たちは、大川に棲（す）む【がば】というおぼけに、みんな喰われてしまいました。【さるはし】と【がば】とは、いわゆるつるんでいるのですね。吊橋という言葉はそこからでたともいわれています。つるむにはわけがあって、そうでもしないと【がば】は飢えてしまいますから。おぼけだってお腹がすくのは辛いものですもの。わたしが橋を渡ったときは、その日に【さるはし】から落ちた人が七人もいたんです。それでわたしは、かれらが【がば】に喰われる前に助けられないかと、【さるはし】の上から下を調べていたのです」

「それで、たすけられたんかのう」

「すでに【がば】に喰われた後でした。仕方なくわたしは【さるはし】を渡り切りました」

「にんげんをくうなんてけしからんのう」

「それは人間の側からの発想です。たとえば豚の側からの発想ですと、豚を喰うなんてけしからん、ということになります」

懐爺は語気を強めていきました。

まるで人間の言い分とはおもわれませんでした。ぼくは豚が好きなので、まあいいかと、口ごたえはやめました。

「どうして、かいじいは、おちなかったのかのう」

「それは、わたしが臆病（おくびょう）だからです。勇敢（ゆうかん）な人は落ちるんです」

「そういうもんかのう。ほんまにそうかのう」

ぼくには信じられませんでした。

ぼくは懐爺ほど勇敢な人間を知りません。

「わたしは【さるはし】から落ちることよりも、【がば】に喰われることのほうがおそろしいから、落ちないように細心の注意をはらったのです。なぜなら泳ぎの達人は、川に落ちることをそれほどこわがらないもんですから」

「かばは、おそろしいかのう。どうぶつえんでみたが、かわいかったのう」

豚も好きだが河馬も同じくらい好きです。

「河馬ではありません。わたしが知っているのは、おぼけの【がば】のことです」

「そうかい、【がば】かい。がばがば、とくうから【がば】なんか」

「まあそんなところですよ。【がば】はたしかに河馬に似ていますが、ある目撃者（もくげきしゃ）は、人魚（にんぎょ）だったと告白しています」

「な、にににににんぎょなら、わしもあってみたいのう」

ぼくの目は輝いていたはずですよ。

「人魚は、絵本にでてくるような可愛い乙女ではありませんよ。本物の人魚は、顔が河馬で胴体が鱔で尻尾が鯨なんです」

「ほ、んんんんものはすごいのう。ますますみたいのう」

ぼくの目はますます輝いたはずですよ。

「【がば】はたしかに、その本物の人魚に似ていますが、いくつか大きく異なる場所があって、人肉が好きなどころと、牙が包丁に似ているところと、目つきが狂人を想わせるところですかね。ちなみに人魚はおぼけではなくて、魚類の突然変異（とつぜんへんい）というものです」

懐爺の説明が面白かったので、ぼくはどうしても【がば】を見たくなくなりました。

それで懐爺には内緒で、【さるはし】に行ってみたのですが、ちょうど村びとたちによって取り壊されている最中でした。

これで【がば】も、飢え死にするしかないなとおもうと、どうにもかわいそうな気がしてなりません。